

21 世紀における川劇 ——文化資源的視点から

人間文化学研究科 地域文化論専攻

9518201 江玉

指導教員 中山 文

中国は多民族国家のため、各地には長い歴史をもつ民族独自の伝統演劇が多数存在している。なかでも四川省の蔵彝走廊地区¹は多民族が頻繁に交流しつつも伝統文化を保ち、独特の地方戯曲「川劇」を育んだ。本論はその「川劇」を研究対象とし、21 世紀における「川劇の文化資源化」について論じたものである。

近年、日本では「文化資源学」という新しい学問分野が注目を集めている。それは「ある時代の社会と文化を知るための手がかりとなる貴重な資料の総体」を「学術研究や人類文化の発展に有用な資源として活用することを目的²」とした学問である。

すなわち「文化資源」とは、「文化と資源という二つの言葉が意味するものに可能性を見いだすことから作られ使用されてきた概念³」のことである。この定義を借りるならば、21 世紀において川劇もまた大いなる文化資源になり得るのではないだろうか。

山下晋司は文化の資源化における社会的区分について、①日常の実践の場での資源化、②国家による資源化、③市場による資源化という 3 つの区分を指摘した⁴。『資源化する文化』。

本論ではその指摘に従い、川劇という文化の資源化を「観光による経済的文化資源化」、「国家による政治的文化資源化」、「日常の実践の場での教育的文化資源化」、という三つの

¹ 「蔵彝走廊」とは、民族学者・社会学者の費孝通氏が 1980 年前後に提起した歴史的・文化的・民族的の区域概念であり、主に四川省、雲南省西部、チベット自治区東部にまたがる横断山脈の高山峡谷地帯を指す。

² <http://bunkashigen.jp/about.html> 文化資源学会のHPから引用 (2018/10/26)

³ 小林真理『文化政策の現在 1 文化政策の思惑』東京大学出版社 2018 年 2 月 20 日、268 頁。

⁴ 山下晋司『資源化する文化』弘文堂、2007 年 12 月、15-17 頁。

側面から論じる。

第一、二、三章では本研究に関する基本的な情報を提示しながら、文化資源学に関する先行研究を概観し、本研究の位置づけを確認する。ここでは第四章「経済的文化資源としての川劇 - 成都市川劇研究院と結義楼を例に」、第五章「政治的文化資源としての川劇 - 成都市川劇研究院『塵埃落定』を例に」、第六章「教育的文化資源としての川劇 - 教育現場からの考察に」の各章について説明する。

第四章「経済的文化資源としての川劇 - 成都市川劇研究院と結義楼を例に」では、元川劇俳優という筆者の立場を生かして行った資料収集、複数回のインタビューとフィールドワーク、長時間の参与観察について述べた。そこから 21 世紀における川劇の文化資源化の全貌を明確にし、川劇が経済的文化資源として、どのように認識、開発、活用されているのかについて考察した。

21 世紀初頭、四川省成都市川劇研究院に俳優として入団した筆者が目にしたのは、「文化大革命の後遺症と劇団の経営不振」という現状だった。劇団からの給料に頼るだけでは国の経済発展に追いつけず生活できないために、若手俳優達は相次いで退職して商業公演に走った。

2008 年の四川省大地震後、中央政府と地方政府はともに「観光復興」政策を打ち出し、都市建設や観光施設整備が急速に進んだ。観光業が盛んになったことをきっかけに、川劇は四川省という地域に特有のブランドとして認知され、「経済的文化資源」として認識、開発、活用されてきた。

2012 年 08 月に成都結義楼文化伝播有限公司の周氏社長が出資し、伝統的なスタイルをもつ「結義楼」を建て、毎日商業公演を行うようになった。そのために、川劇の「観光による経済的文化資源化」はさらに進み、今や川劇は四川省文化の名刺代わりとなっている。

筆者は成都結義楼文化伝播有限公司の周小衡氏と成都結義楼文化伝播有限公司の主演級俳優冉英七氏の協力を得て、その公演内容についてインタビューを行った。また、元川劇俳優という立場を生かし、2017 年 4 月 1 日から 2018 年 4 月 1 日までの 1 年間に、結義楼で川劇「変面」を上演しながら、参与観察を行った。

これによって、上演プログラムや上演時間、演目順番、演目名、観光客、俳優の状況などを詳しく記録し、結義楼の実態を調査してその全貌を把握した。その結果、21 世紀に川

劇が「経済的文化資源化」されたプロセスを明確にし、商業公演がもたらした経済効果や運営体制、経営形態や芸術形式などの変化を指摘した。川劇が四川省文化の代表として、経済効果をもたらす大いなる資源になり得た経過について検証し、今後の川劇のもつ市場的価値について考察を行った。

第五章「政治的文化資源としての川劇 - 成都市川劇研究院『塵埃落定』を例に」では、まず『塵埃落定』に関するギャロン・チベット族、ギャロン・チベット劇などの基本概況を提示した。その上で川劇がどのように「政治的に文化資源化」されたのかというプロセスを明確にし、その特殊な地域性が果たした役割を検証した。

20世紀初期、川劇は政治家や知識人から「政治的な文化資源」として認識され、時事川劇と時装川劇の創作上演によって、政党の政治理念を宣伝する手段となった。中華人民共和国建国後は、四川省各地の劇団は相次いで政府の組織によって接収され、川劇は省・市の文化局の管理の下に置かれ、民衆教化の担い手とみなされた。

その後文化大革命時期には、伝統劇の上演は禁止され、プロパガンダ性の強い『八つの革命的样板戯（模範劇）⁵』以外の上演は許可されなかった。だが四川省では「多数の少数民族と漢民族が混在する」という独自の地域性のため、方言を使用した新編現代川劇『雲岩寨』を創作、上演した。

『雲岩寨』は少数民族との密接な関係を題材にしているとはいえ、政治的メッセージを直接に伝えるだけの生硬なストーリー構成で、そこに少数民族の舞踊、歌唱などを取り入れた短編作品に過ぎなかった。その後長期にわたり特筆すべき少数民族をテーマの川劇作品は誕生しなかった。

だが21世紀に入り、状況が大きく変化した。1998年、四川省アバ・チベット族チャン族自治州馬爾康県出身のチベット人作家阿来の小説『塵埃落定』がベストセラーとなり、ドラマ化、舞踊化されて一大ブームが巻き起こった。2013年、四川省成都市川劇研究院は、「少数民族と漢民族が混在する」独自の地域性を活用し、少数民族と密接な内容を題材とした舞台作品の実例として、『塵埃落定』の川劇化に挑戦した。これは政府の「芸術は政治に奉仕すべし」という基本方針を維持しつつ、本格的な芸術作品を作ろうとする四川省成

⁵ 5つの京劇（「智取威虎山」「海港」「紅燈記」「奇襲白虎団」「沙家浜」）2つのバレエ劇（「紅色娘子軍」「白毛女」）、1つの交響曲（「オーケストラ沙家浜」）をいう。

都市川劇研究院初の試みであった。

次に、川劇版『塵埃落定』の台本から、5つのストーリー（汪波土司と戦争、麦其土司の継承、アヘンの氾濫・白漢人（国民党）と紅漢人（共産党）、官寨の崩壊）を取り上げ、作品のもつ政治性について論じた。

そこから21世紀の川劇版『塵埃落定』が20世紀の『雲岩寨』との芸術形式上における相違点を明確にした。さらに2作品を比較することで、21世紀に川劇が地域特有の政治的文化的資源として認識、開発、活用されたプロセスを明確にした。

また、川劇版『塵埃落定』の舞台化創作への資料、インタビュー、現地調査等に基づき、川劇版『塵埃落定』がギャロン・チベット劇を川劇にどのように適切に取り入れてこれまでにない新しい芸術形式を作り上げたのかを考察した。その結果、芸術形式を豊かにすることで豊穡な舞台表現が生まれていると評価した。

第六章「教育的文化資源としての川劇 - 教育現場からの考察に」では教育現場における川劇の普及活動について論じたものである。かつて川劇教育にはプロの役者を育成するためのカリキュラムしかなかった。

だが21世紀の戯曲界では、伝統芸能を継承する組織や観客の減少が問題となった。戯曲を広く一般大衆に普及するため、中央政府は「川劇はキャンパスに入ろう」政策が提唱し、これをきっかけに状況が変化した。

2012年に提唱された「川劇進校園（川劇はキャンパスに入ろう）」政策を機に、各小・中・大学⁶のキャンパスで川劇公演が行われ始めたのである。その結果、現在では「一般生徒を対象とした川劇教育」の道が模索されるようになった。川劇教育には「プロを育成する教育」と「一般生徒を対象とした教育」2種類のカリキュラムが生まれたのである。

本章ではまず、川劇がどのようなプロセスを経て、教育的文化資源として認識、開発、活用されてきたのかを明確にする。次に川劇俳優であり川劇教師でもある文冬氏、劉磊氏と生徒、保護者達へのインタビューをもとに、カリキュラム作成の過程と授業の実態、川劇普及教育の全貌を明確にする。

さらに、一年に一度の大イベントである「四川省小・中学校川劇伝習普及展演」、お正月に四川省の観光名勝武侯祠で行われる「武侯祠大祭祀」および川劇史上初の塾「舟石伝承」

⁶ 現地調査によると、高校は進学受験があるため、川劇教育を行われていない。

の例を挙げて、川劇普及教育が生み出した成果と評価する。

第七章では川劇の「経済的文化資源」、「政治的文化資源」、「教育的文化資源」の三側面の研究結果から結論を導き出す。21世紀の川劇は「芸術は政治に奉仕すべし」という政府の政策に適応しつつ、地域経済、地域文化、地域教育にも高い価値を持ち、人々の日常生活を豊かにする文化資源として機能していることが明確になった。

21世紀に入ると、この三つの場は互いに影響・浸透し合い、ますます重視されるようになった。川劇という地域特有の文化資源は、一般民衆が主体的に参加することによって、地域アイデンティティを再認識し、土地への愛着を深める上で重要な意義を有しているのである。

川劇を文化資源としてとらえることは、今後の川劇の自立的発展にとっても、不可欠な視点であり、さらに大きな価値をもつようになるであろう。その視点は、川劇俳優であり川劇研究者である筆者にとっても、極めて重要な示唆を与えてくれるものである。

キーワード：経済的文化資源化 結義楼 芸術形式の簡略化 政治的文化資源化 塵埃落定 新たな芸術形式 教育的文化資源 一般生徒向けの川劇教育 自立的発展